

れている。

こんどは、中途からの離脱でなく、はじめからの独自行動である。それでも、ゼンセン同盟としては、好ましくない事態であることは言うまでもない。しかし在来的な考え方や処理方式を超えねばならぬ条件を顧みれば、その発想転換を、特に求められるのは、ゼンセン同盟のごとき、産業別の上層団体であるはずだ。ゆえに、型にはまった硬直思考でなく、傘下各組合の、暗中摸索的な、新方途打開の努力を柔軟に評価して、そこに上部団体としての、多面的な即応能力を、自らのものにして行く必要があると思う。

本稿執筆の途中で、家電関係の四十数社が、経営者側の統一意向として、今年の春闘では、定期昇給以外、ベースアップには応じないことを申合せた旨の新聞報道があった。今後の組合との折衝で、どういう結果になるかわからぬけれど、これまた、春にはきまってベースアップ

という在来的概念を、打ち破ろうとする傾向の一つだと言つてよい。

いずれにしても、労使双方、今やわが国が、たんなる景気循環の不況だけでなく、経済構造の変革に迫られている難局を、真剣に認識せねばならぬ。景気循環的な意味の不況脱却だけなら、それはおそらく、そう先ではなしに、事実としてはつきりして来るであろう。しかし、だからと言つて、それが従来のごとく、また景気の高い高度成長に転ずることは、望み得られない見透しである。

過去二十年もつづいた春闘方式。毎年恒例のベースアップも、実は、高度成長なればこそ可能だったのである。その高度成長が、再び起り得ず、低度成長を常態とせねばならなくなつた以上、同じ方式のベースアップがむずかしくなるのは、当然だと言わねばならぬ。過去の成果に安住して、安易に同じ方式を追い求めるのは思考の怠慢である。これは労使に言えることだ。いろいろな試みや動きが出て、乱戦状態になるのは仕方がない。しかし、その乱戦状態の中から、必ず、新たな方途が打開されるであろう。労使双方が、真剣に、そして必死になれば、必死になれば、己れの内なる無限の可能性が開発される。

## モスクワ・ウランバートル・北京

— 全人代の時期に再び中国を訪れて —

中 島 嶺 雄

### 人民中国誕生後の対ソ関係

私自身も思いもかけず、今回の旅行では中ソ対立下に、一種の中ソ両国の緩衝地帯となっているモンゴルを経て、北京に入るコースをとることが出来ました。旅行の目的は、いま私共が進めております海外学術プロジェクトの一貫として、中ソ対立を歴史的にもう一辺見直してみようという問題意識を持っていたからです。単に一九五六年以降のイデオロギー紛争としての中ソ対立、あるいは六〇年以降の社会主義陣営の対立としての中ソ対立という問題よりも、もっと根本に遡って、歴史を振り返ってみる必要が

あるのではないかと考えたわけですが。

いろいろ調べもし、少し大きな仕事にかかっておりますが、そうなりますと中ソのはざまに存在するモンゴル、あるいは昔の満州、現在の東北をめぐる中ソの角逐、さらには朝鮮戦争前後のソ連のアジア政策と中国の政策を含めて再検討してみなければならぬわけです。最近「蒋介石秘録」が現われたり、その他幾つかのドキュメントも出ておりますが、アメリカ側にもそういうものが大分出ております。アメリカのナショナル・アーカムに行つてみますと、一九四〇年代の終り頃までの外交文書が解禁になっています。

これらのものを見ますと、従来私が考えていた中ソ関係は、随分限られた資料の中で見ていた気がします。そういう状況の中で、戦後史あるいは第二次大戦史というものを再検討する中で、中ソ関係を見る必要があるのではないかと考えているわけです。とくに、ヤルタ密約として知られているヤルタ協定における極東条項の存在は、当時の国際関係を規定していただけでなく、とくに中ソ関係を考える場合には、あとあとまで意味を持ってくるわけです。ヤルタ密約にもあるように、例えばモンゴルの宗主権をめぐる問題は、中国、当時は国民政府ですが、争ってきた。一九四五年の中ソ友好同盟条約は、「蒋介石秘録」にもあるように、ヤルタ密約の極東条項の存在を知った中国が、宋子文をモスクワに派遣してスターリンと交渉しますが、結局スターリンの術中に陥ってしまわざるを得なかったわけです。

一九四九年に御承知のように、共産党が政権

リン時代、コミンテルン時代を通じての幾つかの中ソの争いを凍結するような気分で、モスクワに赴いたのだらうと思います。そして、またモスクワに行く直前、共和国の誕生直前ですが、いわゆる向ソ一辺倒を宣言しています。

この向ソ一辺倒を宣言する段階では、アメリカのいろいろの工作があります。当時の延安政権とアメリカ國務省との間の、いろいろの交渉経過というものも明らかにあります。毛沢東は非常に迷うわけです。アメリカの方に賭けようか、ある意味でのアメリカの中国チトー化政策に乘ろうか、といういろいろ迷うわけですけれども、結果的には向ソ一辺倒という形でソ連に賭けることになります。この毛沢東の決断は、いろいろの考慮があった上での決断ですが、ソ連を訪れるに当って、毛沢東にはある種の期待があったと思います。しかし、結果的には、スターリンの冷淡な処遇を受けるわけです。恐らく、その時点からのちの中ソ関係とい

を握りまして、新しい共和国が生れ、その年の暮れに毛沢東はモスクワに行きます。二カ月半の交渉ですが、この交渉についても氷山の一角しか現われていませんでしたが、その内幕みたいなものが徐々に明らかになってきております。そういう点を考えますと、中ソの一畝岩的な友好あるいは兄弟的な友誼という表向きのスローガンにもかかわらず、やはり歴史的な角逐というものはありました。例えば、現在の東北の旧満鉄、旅順・大連の租借権の問題のみならず、モンゴルが大きな問題になったわけです。

結局、毛沢東も最近の公開資料などが明らかになっている通り、ソ連、スターリンに対し随分談判をします。しかし一定程度の成果を勝ち得たものの、スターリンに対し譲歩を余儀なくされた面があったのです。恐らく当時の毛沢東は中国革命の勝利者として今度こそスターリンが認知してくれるであろう、歓迎してくれるであろうと胸をふくらませながら、かつてのスター

うものは、毛沢東中国の対ソ不平等化是正の衝動と考えることが出来るわけです。

とくにスターリン死後——この間朝鮮半島をめぐる幾つかの中ソの角逐がありますが、ある意味で朝鮮戦争はスターリンのアジア戦略に中国が巻き込まれる結果となり、中国の内政、建設に朝鮮戦争という臨戦体制が役立ったにもかかわらず、スターリンのやり方に対する幾つかの不满を毛沢東の側に、新たに形成させることになりました。スターリン死後はじめてフルシチョフと会談しました。その間に東北の指導者高崗の肅清事件などがありますが、当時集団指導体制の中で党内闘争が行われていたこともあって、フルシチョフはスターリンの中国政策を是正する方向に働くわけです。

一九五四年、当時党の第一書記であったフルシチョフはニコヤン、ブルガーニンらを伴い北京を訪問、中国首脳との会談はじめて中ソ関係の是正が行われるわけです。中ソの不平等関

係がこの機会に平等化され、中国側がはじめて満足を感じたのは、その時点ではないかと思われれます。にもかかわらず、その後はフルシチョフとの関係もうまく行かず、その後については皆様御承知の通りであります。

こうみてきますと、中ソ関係は絶えず復原力が働いております。スターリンはあれほど中国にとつて憎かったわけですが、スターリンが死んだ時には、急速周恩来がモスクワに飛ぶというところで、ある種の復原力が働いています。ブレジネフになると、ブレジネフはフルシチョフより悪いという形で、中ソの対立はまたエスカレートすることになります。ある時は復原力が働いても、また双方が裏切られる、とくに中国側が幾つかの期待をもち、それが裏切られる毎に中ソ関係は深刻さを増し、今日になっていてと考えてよいと思います。

このような問題意識を持って、従来は限られた資料から僅かしか見えなかった中ソ関係を広

に対して、ソ連の中国研究者の中に不満を持つものがかなりいるということです。つまり、何でもかんでも中国や毛沢東を教条的に批判しさえすればそれでよい、というものではないという反省が中国研究者の間に生れています。ソ連の中国批判を読みますと、材料は何処から集めたものであっても、中国批判でありさえすれば羅列する、これが科学的社会主義、マルクス・レーニン主義の立場に立つ分析か、と思われるものが多いのですが、そういうものに対する反省が出てきているのです。

一九七〇年に科学アカデミーに新設された、情報科学研究所というのがあります。一九七〇年に私が行った時は、モスクワの古い小さな建物にありましたが、今度行ってみると、モスクワ郊外のモスクワ大学の裏手に、モダンな大きなビルが建ち、そこに移っていました。世界の中国研究に関する論文や評論をファイルしており、科学アカデミーの社会科学関係の図書を全

い意味での、第二次大戦史あるいは戦後の冷戦史の再検討ということを踏えて考えてみたい、ということでは私は勉強しておりますので、その一貫として今回ソ連に行ったわけです。

### 変化するソ連の中国研究

ソ連で注目すべきことは、毛沢東以後の中国に対する取組み方、あるいは期待というものが非常に強いということです。一般的にもそう言えますが、今回科学アカデミーの中国研究所を訪問して、一層その感を深くしました。その中には、かなり前からの知友もおりますが、現在のソ連の中国研究には大きな亀裂があります。一つは、体制的な中国研究、例えば、極東研究所にストラトコフスキーという有名な学者がおりますが、彼に代表される中国研究、いわば現在の体制に合う、体制ベッタリの中国批判という形のものです。

今回とくに感じたのは、このような中国研究

部ここで統轄し、分類しております。

これは、ソ日友好親善協会の副会長で、日本にも数回来たことのあるベリューシンなどに代表される傾向です。現在此処の副所長をしているクザジャン、彼は名前の通りアルメニア人でしょうが、彼などもそうです。ストラトコフスキーの上にはチフピンスキーやカーピッツアがおります。カーピッツアは御承知の如く、中ソ国境交渉にも参加したソ連の中国研究の大御所です。カーピッツアは、現在外務省のアジア社会主義国を担当するアジア第一課長です。こういう体制ベッタリの研究者に対して、いわば反体制というか、そこまではっきり言うことが出来るかどうか判りませんが、そういう潮流がかなり多いことを感じました。こういう人達と話してみますと、中国批判ということでは両者は一致していますが、教条的な中国批判では駄目だ、中国も変わるし、中ソ関係も変わるのだから、そのためにもっとリベラルな、アカデミ

ツクな研究が必要であると言います。チェコ事件やソルジェニーツイン問題にしても、これらの研究者は私と意見の一致する面が多いのです。もっとも、政府が悪いとはっきり発言できるわけはありませんが、ほのめかすようなことは言います。

体制的な中国批判をする人達も、リベラルな中国批判をする人達も、中国は何時か変わる、とくに毛沢東以後に期待するという点、現在の中国関係の悪化は毛沢東の反ソ主義によるという点では一致しています。毛沢東亡きあと、中国がどう出るかということに大きな期待を持っているように思いました。御承知の如く、ソ連は鄧小平は批判しておりません。周恩来にも随分控えておりましたが、ここ一、二年周恩来批判も行っておりすけれども、丁度日本共産党が実権派劉少奇、鄧小平を批判していないのと同じように、ソ連も毛沢東一派に焦点を置いて中国を批判しています。

親ソ派グループの影響力が残っていたと当時のコミンテルンのアドバイサーであったオット・ブラウンの「回想録」にも出ており、四二年の前半までは毛沢東も王明グループに気を使っていたと書いています。その王明が昨年三月、モスクワで亡くなりました。王明は党の指導権を奪われて後、コミンテルン代表のような形でソ連に残っていたのですが、彼の墓がノボデビッチ修道院にあると聞いて、ある日私は出掛けてみました。

ノボデビッチ修道院の墓地にはゴーゴリ、チエホフの作家や文豪が葬られており、最近ではフルシチョフが葬られています。フルシチョフの墓は非常に綺麗に出来ており、日曜日でもあったので市民がフルシチョフ詣をしておりましたが、王明の墓に詣る人はありません。王明の墓を見付けることが出来るかどうか心配したのですが、彼の墓はよい場所に、遺体の大きさそのままの大きな、立派なもので、写真もつい

今回の全国人民代表大会で通過した憲法の中に、社会帝国主義批判を盛り込んだことは、ソ連のそういう期待を裏切るものであったかも知れません。「プラウダ」のアレキサンドロフ論文などを見ますと、そういう期待を裏切られた怒りみたいなものが出ています。最近の中ソ関係はいろいろのことが言われながらも、徐々に理性的な方向に動きつつあっただけに、中国が憲法の中にまで反ソ主義を入れたことは、ソ連にとってかなりなショックではなかったかとの感じがします。

### モスクワに眠る王明

ソ連にも若干関係しますが、一九三〇年代前半の中国共産党の最高指導者であった王明、彼は一九三五年の遵義会議で毛沢東が指導権を確立して以後は、ほとんど影響力を持たなかったと公式には言われておりますが、四〇年代の前半、とくに四二年頃は王明、博古などの留ソ派

ておりました。ノボデビッチに葬ることさえ大変なことであるのに、立派な墓に葬られているということは、最後までソ連が王明を大事にしていたことを語るものだと思います。私にとっても感慨深いものがありました。

### ソ連支配下のモンゴル

いろんな体験をしながら、モスクワに一週間滞在しました。モスクワ滞在のいま一つの目的は、モンゴル行きのビザを取ることでした。モンゴルは一九七二年三月、日本と国交を樹立し、昨年にはウランバートルには日本の大使館も出来ました。現在日本人は大使館員が数名いるだけで、商社の派遣員も新聞記者も駐在しておらず、内陸アジアの孤島といった感があり、国交が樹立されたといっても、自由にモンゴルに入ることは出来ないのです。

偶々一昨年岩村忍先生をチーフとする学術調査のチームを派遣することになりましたが、先

方から入国を断われました。中ソ関係が非常に悪い時でもあったので、岩村先生はイルクーツクで足留めされ、帰国されました。今回私の大学の同僚のモンゴル語の先生が、予備調査のため入国申請をしましたが、結局これも入国出来ませんでした。私の場合は幸いにも、いろいろ手を打ったこともありませんが、モスクワでモンゴル行きの際に手に入れることが出来ました。そして、ブラーツク、イルクーツクを経てシベリアからウランバートルに入ることができました。ウランバートルは現在非常に寒く、夜間は零下四〇度、日中の天気の良い時でも零下一五度ぐらいです。

モンゴルに入って先ず驚いたことは、かつてモンゴル民族が持っていた偉大な民族的エネルギーというものが、ほとんど感ぜられないということです。ソ連の影響下に完全に押えつけられている、という印象を受けました。よくモンゴルをソ連の十六番目の共和国という人があり

スターリンの銅像やレーニンの銅像と共に、モンゴルの赤の広場には革命と建国の英雄スフバートルの銅像がありますけれども、すべてそういう形で評価されているのです。歴史を振り返ってみますと、セミヨノフの白衛軍がシベリアを追われて、ウランバートルに拠点を作ろうとした時、赤軍を出した事実がありますが、当時のモンゴル人民革命党の軍隊と赤軍が一緒になってウランバートルを解放したのです。しかし、ツアアのロシアも、レーニン時代のロシアも、モンゴルを自分の影響下に勝手にしようとしてきたのです。

## 厳しきモンゴルの現実

その証拠には、モンゴル革命が一応成功して

ますが、現象的に見る限り、それを肯定せざるを得ない現実が各方面にあります。そのような状況の中で、イデオロギー的にも、また生活の面から言っても、やはり厳しいものがあるように思われます。イデオロギー的厳しさを証明する一つの材料として、今日のモンゴルの科学アカデミーの正面に、巨大なスターリン像が依然存在しているという事実が挙げられます。恐らくスターリンの銅像が市内の目抜き通りに聳えているのは、世界でモンゴルとアルバニアぐらいだけではないかと思えます。

しかも、科学アカデミーというのは、現在のモンゴルのイデオロギー的状况をはかる一つのメルクマールとなる場所です。その正面に、スターリンの銅像があるということに象徴されているのではないでしょうか。モンゴルではあらゆるナシヨナリスティックな傾向は、すべて押えられています。十年ぐらい前に、ジンギスカン生誕八〇〇周年記念が行われましたが、こ

から、今日ブリヤート共和国にソ連が編入しているトワ、ザバイカルのモンゴル人の居住地区の返還を要求していますが、ソ連はこれらの地区をモンゴルに返還していない事実からも明らかです。ソ連はモンゴルのこのような動きを押えてきており、ナシヨナリスティックな傾向を示すと、先程申上げた通り押えられるのです。例えば、科学アカデミーはスフバートルと並ぶブリヤート・モンゴル人シヤムサランあるいはシヤムサラムが作ったわけですが、彼は一九三〇年代のスターリン肅清でソ連で肅清されました。この人達は、いまでも民族主義者というレッテルが貼られて、一方スターリン像がいまもあるという処に問題があるように思えます。

例えば、ウランバートルの学生にジンギスカンをどう思うかと聞いても、非常に公式的な答えしか返ってきません。ジンギスカンは他民族を圧迫した征服者である、というような答えで

す。要するに、それはソ連がジンギスカンを評価することを拒否しているからです。またモンゴル民族の魂であるべき「元朝秘史」について聞いてみても、当時の社会構成を階級的に分析する材料である、というような無味乾燥な答えしか返ってきません。従って、現在のモンゴルはイデオロギー的に見ると、完全に社会主義的であり、ソ連礼讃に終っているかが判ります。学生たちに対し、中国を見てみ給え、中国はジンギスカンを称え、秦の始皇帝を称えて、毛沢東は歴代の英雄をみな自分のものとしているのではないか、モンゴル人がジンギスカンをそのようにおろそかにしていると、中国人に横取りされてしまうぞというど、学生たちは嫌な顔をしています。

日本人はモンゴルというと、非常に幻想的なロマンチズムの中で対象化します。これは内蒙古を中心にしたものだと思いますが、檀一雄の「夕陽と拳銃」や山中峰太郎の「アジアの曙」

### 貧しい民衆の生活

ウランバートルの目抜き通りだけを見ると、都市計画によって草原に建てられた街ですから建物は立派です。この建物は日本人抑留者が昭和二十年から二十二年にかけて建てたものです。しかし、中心部を一步離れると、包がスラム化したところが見られます。草原の中にある包なら綺麗でしょうが、都市の永住化された包がスラム化するのも当然という気がします。そういう処には外国人は立入ることは出来ませんし、写真を撮ることも出来ません。厳しい検閲があります。私も写真のトラブルに遭遇しました。

また青空市場というものがあります。本当にモンゴルの素顔を見ることが出来ます。寒い所で戸板の上に僅かな品物を並べています。品物といえば、壊れたライター、靴片一方、瓶、ナイロンの風呂敷といった類いのものです。そこ

に描かれた、草原を馳ける馬上の英雄というロマンチズムの影響があると思います。今日でも草原の革命国家、遊牧社会主義国家、草原の包とか、何れにしても、そのようなロマンチズム的な憧れから対象化しているのですが、これは日本人の自己満足の対象としてのモンゴル像でしかないと思います。実際のモンゴルは、生活の面でも厳しいものがあります。例えば、遊牧国家であり、人口も少ないので、ミルクは豊富にあるように思いがちですが、実際はそれが一番欠乏しているのです。表面的には判りませんが、モンゴル人の手になかなか入らない、という事実を示す証拠があります。ホテルで出る羊の肉は日本で考えるのとは違って堅い肉ですが、その肉でさえ一般のモンゴル人の手には入らないようです。モンゴルはコメコンに加盟していますから、肉もミルクも全部ソ連に持って行かれるのだという話もありますが、それがどこまで真実かは判りません。

え、人が群っているのです。野菜なども非常に少ないようです。しなびたジャガイモ数個を台の上に並べているものもいました。ここも写真を撮ることは出来ませんでした。ここの品物を眺めて、生活面からも厳しいものがあることを感じました。

このような場所を外国に紹介することを非常に嫌います。有名なモンゴル学者オーエン・ラティモアも写真撮影は許されなかったと言います。彼はモンゴルに取っても大事な人物でありモンゴルのよき紹介者であると思いますが、その彼にも写真を撮らせないのでした。外交官でさえ青空市場を撮影して、抑留されたものもあるという厳しさです。イデオロギー面からみても生活面からみても、モンゴルはソ連の影響下にあり、厳しい状況下にあると言えます。私はかつて中央アジアを歩いたことがあります。むしろウズベックあたりの方がのびのびしているのではないか、という感じがしました。

いま一つ目についたことは、街の到る所にソ連兵がいることです。これは国境まで続いており、主要な駅にはソ連の軍事基地があり、ソ連兵がいます。一般民衆がどう感じているかはよく判りませんが、占領に等しい状況にありますから、決してよい筈はないと思いますけれども、もっと悪いモンゴル人の中国観で救われているのです。にもかかわらず、ソ連に対する悪感情はいろんな処に現われています。例えば、税関吏のソ連兵に対する検査は厳しくしており、またゾルチンという唯一の旅行社がありますが、ソ連関係のことを頼みますと嫌な顔を示します。これらの点からみても、ソ連に対する潜在的な反発がモンゴル人にはあると思います。しかし、モンゴル人は中国に対し物凄く悪感情を持っていきますから、ソ連はそれで救われている感じがします。

### 険悪な中蒙関係

たのだと強調します。中国に行けばソ連は如何にひどいことをしたか、援助を打切り途中で技術者を引揚げたと言いますが、坐標軸を一つずらすと、中国はモンゴルで同じことをしているのです。私共は中ソ関係を両者だけからみますが、モンゴルという中間地帯、両者の間の緩衝地帯をおいて考えてみますと、中ソのエゴイズムというものが、一層リアリティをもってクローズアップされる感じがします。その意味でも私に取っては興味ある対象でした。

中国とモンゴルの不和の中の犠牲者ともいうべきものは、旅蒙華僑といわれる在留中国人です。モンゴルに全体で二万人と言われますが、ウランバートル市とその周辺に七千人、うち二千人は無国籍といわれています。彼らは捕虜みたいな立場にあり、最下層の生活を強いられています。職業は塵芥処理、ペンキ塗り、糞尿処理などです。中国人はよく働き、能力もありませんから、ペンキ塗りとか家を建てるという仕

日本に対しては非常によいと思います。あるインテリのモンゴル女性は、やはり日本はアジアのリーダーであると強調していました。モンゴルは、中ソのはざまにある厳しい宿命を日本がクローズアップされることによって、打開しようと考えているのではないかと思われるぐらい、日本に対してはよいわけです。かつてのノモンハン事件のことも口には出しませんが、歴史博物館や革命博物館には多少の展示品もありますが、圧倒的に多いのは清朝が如何に苛酷な支配をしたか、という反漢反清の感情を煽るものです。

国民の精神的バックボーンをそこに置ことしているのではないか、という印象を受けます。一九六四年、毛沢東中国はモンゴルに対する援助を中止して、一切の要員を引揚げました。モンゴル人は街にある一つのデパートを指さして、これを見てくれ、これは中国が建設援助を約束しておきながら、途中で皆引揚げてしまっ

事は中国人に適しているともいえます。なかには金を貯めているものもあると言われますが、全体的には惨な生活を強いられています。

何れにしても、モンゴルの中国に対する感情は悪いとはつきり言えます。ソ連の圧倒的影響下にあり、中国の言葉を借りればソ連社会帝国主義の植民地主義下にあるともいふべき状況の中で、反ソ感情が爆発しないのは、片一方に中国に対する敵愾心があるからだと思えます。

### 生き残るラマ教

モンゴルについて、関心のある問題はラマ教です。チベットとモンゴルはラマ教のメッカですが、チベットはダライ・ラマも追放されている現状ですから、モンゴルのラマ教の状況は関心がありました。モンゴルの革命史を見ると判るように、僧族封建制と言いましようか、僧侶が権力を握り圧倒的に支配していました。従って、革命の当初はラマの活仏を元首として、革

命国家を誕生せざるを得ない程、ラマ教の影響が強かったのです。そのラマ教は現在も残っています。ウランバートル市内にも、ラランテクリン、中国語で慶寧寺という大きなラマ廟があります。

日曜日そこへ行ってみました。沢山の信者がお参りしており、鉄板を斜にした独特の礼拝板に身体を伏せて祈っていました。ラマ教は黄教ともいわれるように、僧侶は黄衣黄裳をまとい、読教をしていました。読教の間には鐘、笛、シンバルのようなリズムカルな音楽が入り一種独特の雰囲気です。偶々そこで出合った青年が、お札を挟んだラマ教のパンフレットを私に呉れました。老人だけでなく、青年の間にも信者がいるのです。革命でモンゴルのラマ教は消滅したのではなく、いまでも残っているのです。今日、チベットは御承知のように、ラマ教の世界ではなくりましたが、モンゴルもラマ教の世界とは言えないとしても、ラマ教はなん

とか生き続けているというのが現状ではないかと思えます。

ダライラマというのは、十六世紀にモンゴルの再興を図った英雄がラマ教に帰依して、チベットから高僧を呼び、ダライと称したのが発祥といわれます。ダライとはモンゴル語で海ということ、海のようなラマということ。チベットからモンゴルに至るあの広大な草原と砂漠と空間は、遊牧騎馬民族の海というわけです。この地域がラマ教で結ばれていたのですがチベットはすでにラマ教の世界ではなくなっているのです。

### 中ソ会談の舞台になるか

モンゴルでいろいろな体験をした私は、三日間の汽車の旅を経て北京に向うことになりました。私は日本を発する前は、ことによるとモンゴルには入れないかも知れない。ましてモンゴルから国境地帯を通過して、中国へ行くこと

は一層難かしいかも知れないと考えていないわけではありませんでした。結果は、幸運にも、ウランバートルで中国行のビザを取ることが出来ました。中国側は十分な調査をしていたようウランバートルの中国大使館と日本大使館の間で、七、八回の連絡があった末ビザが出ました。私が中国に対し比較的自由に発言していることが、今回の中国入りに幸いしたので、中国も随分変わったなという感じを持ちました。私には、希望通り一週間の滞在ビザが出ました。

ビザの出る前日には、ウランバートル駐在の新華記者の招待を受けました。あそこは外国人はいないし、客もないので私のようなものが行くと珍らしいのでしよう。新華社の記者はソ連の状況、日本の事情、日中、日ソ関係などについて質問しました。翌日十時に約束通り中国大使館に行きますと、中国大使が玄関に出ておりました。ビザを貰いに来た自分を出迎える訳はないと思いつながら、札を述べると向うで待っ

ていてくれと言いましたが、何だかソワソワしている感じです。ホールのベンチで待っている処へ、ソ連の大使が入ってきました。私は偶然ウランバートルにおける中ソの出合いの目撃者となったわけです。中国大使館にあとで聞いたところでは、単なる表敬訪問ということであり、私もそうだろうとは思いましたが、もし中ソが会談するとすれば、外国の特派員のいないウランバートルは恰好の場所であろうと思いません。

一九六三年の中ソの決裂以来、鄧小平とスーロフが何回か此処で会談したという噂もありますが、この噂は信憑性がないと思いますけれども、そういうことの出来る舞台だということは記憶しておいてよいと思いました。モンゴルの中国への国境ザミンウデまでは一日半の汽車の旅です。沿線の風景は単調なゴビの砂漠で、放牧の家畜の群れを見るだけです。異国情緒豊かな風景とも言えますが、到る所にソ連の軍用



トラックが砂煙りをあげて走っており、空にはソ連の軍用機が旋回しています。サインシヤンダという所を通過しましたが、この東方二〇〇キロの地点が林彪が墜死したウンデルハンだと教えられました。

ウランバートルでもこの問題について聞きました。モンゴル側の発表では林彪はモンゴルでは死んでいない、と書いておられます。飛行機が墜落したことは事実だが、林彪は乗っていなかったと言っております。一般の民衆もそう言うておりますから、かなり教育が徹底しているようです。あの飛行機の残骸は、いまま砂漠の中に散乱しているそうです。事件直後、中国側は遺体の引渡しをモンゴルに要求しましたが、モンゴル側が搭乗者の氏名通報を要求したところ、中国側はその後遺体引渡しを要求しなくなったといわれています。その点からも、モンゴルは林彪が乗っていなかった証拠だと言っておられます。結局、遺体引渡し問題は、そのままに

ルムを抜かれたという話も聞きました。これでは何のために新聞記者を招待したのか判らないようなものですが、私もそれなりに覚悟はしていました。やはり厳しいもので、フィルムや荷物検査を一時間ばかり受けました。弁当の中まで調べる厳重なものです。

先方からみると、久びさに獲物がかかったようなものです。車輛には私とブルガリアの外交官の二人だけです。外交官はフリーパスですから、相手は私一人というわけです。やっと検査が済んで私がホッとしている処へ、今度は七、八人がドカドカと私のいるコンパートメントに入ってきて、ドアに錠をかけました。もう一度検査するというのです。今度は私の持っている外貨についていちいち質問しました。私が不法に外貨を所持する筈はないのですが、その証明がないので全部没収するというのには驚きました。これから中国へ行くのに、外貨がなくては動きが取れませんから私も必死です。結局、パス

なっているようです。ウンデルハンに割に近い所の中国側の服務員に聞いてみますと、彼等は中国の発表通り、叛賊林彪は此処で死んだ、裏切り者にはよいところは無い、と言います。

このように、林彪事件の評価は中蒙両国では百八十度違うわけですが、私の感じでは普通の状態であれば、飛行場でもなく草原ですから降りることは出来る筈です。それが出来なかったのは、飛行機の中で格闘があったのではないかと思います。モンゴル側もそんなことを言うておりました。

### 厳しい中ソ国境

モンゴルの国境ザミンウデに到着、いよいよ中国入りが出来るかどホッとしていますと、朝六時半頃税関が検査にきましたので、予め予想はしていましたが、フィルム検査も厳しいものです。昨年十一月、革命五十周年にモンゴル政府の招待を受けた新聞記者が、写真機からフィ

ポートに記入してある外貨の額を見せて、やっとなりました。彼らはドルや日本円が珍らしかったのです。トランプのように、ドルや日本円を一枚一枚テープルに並べて見ていました。どうもドルが欲しいようでしたが、取られては当方も困りますのでやっとなり得して貰いました。

最後に、何故中国に行くのかと聞くので、いよいよきたなと私は思い、いろいろ説明しました。もっとも考えてみると、中国とモンゴルの関係は非常に悪いのですから、この国境を通過して中国へ行くことは一種のモンゴルに対する裏切りであるわけです。私が中国語を喋ることで一層印象を悪くしたようです。結局、私は此処を通過することが出来たわけですが、一時は駄目かと思いました。折角一日半をかけて国境まで来たのに、またウランバートルに帰えされ、シベリア経由で帰国することになるのか、と思いました。

そこで、私はモンゴルと日本の友好の必要性

を力説、日蒙友好こそ必要なことだと説得しました。最後になって、彼らも今回は例外的に中国への通過を認めると言いました。彼らは、一般旅行者がモンゴルから中国へ行くことを非常に嫌います。私の場合は先方にも一応の理由があったと思うのは、パスポートに予め中国へ行くように記載されていなかったのです。モンゴル入りが難かしいと思いましたが、はじめから中国入りを申請すればモンゴルにも入れないかも知れないと考えました。そこで、一応モンゴルに入り、中国行きはウランバートルで申請しました。その点が、先方には気に喰わないということがあったかも知れません。

### 漢人社会化する内蒙

モンゴルでいろいろな問題がありましたので、中国領に入った時は本当にホッとしました。よく中国を旅行した人が感激して帰ってきました。それが、モンゴル側に較べると中国側の応待は至れないかと感じました。

私も心情的には、東はホロンバイル、黒竜江省から西は中央アジアに至り、北はシベリアから南は内蒙古までの蒙古民族の分断された現状をみて、モンゴル統一の夢を理解しますが、内蒙古への漢人の進出、内蒙古の漢人社会化の現実を見ますと、それは非現実的ではないかとの感を深くしました。沿線のみる駅長、お巡りさんは全部中国人です。駅に集まっているモンゴル人は沢山見ますが、管理者は全部中国人です。如何に内モンゴルの漢人化が進んでいるかが、これでも判ります。蒙古人民共和国側は、中国は現在内蒙古人を抑圧していると、この点を挙げて批判するわけです。モンゴル人でありながら、中国側に寝返ったウランフなどけしからんと言いますが、そういう現実もあるように思

り尽せりでした。モンゴルは歴史的にも中ソ両国に痛めつけられ、現在まだソ連に痛めつけられている。一種の小国の大國主義というようなものだと思います。中国側の国境の駅では半日ぐらい停車しますが、駅長が貴賓室に案内してお茶の接待までしてくれました。そこから北京まではまた一日半ばかりゴビの砂漠の汽車旅行が続きますが、驚いたことに、中国側はこの不毛の地に植林をしています。もともと植林してあるのは駅の周辺だけですが、それでもモンゴルとは大変な違いです。沿線に見るコンクリート製の電柱にしても、中国側が遙に立派です。建っている家も、モンゴルは包かソ連式の木造建築ですが、中国側は土壁と瓦屋根の典型的な中国の民家です。私は内蒙古的な風景を期待していたのですが、モンゴル社会というよりも完全に漢人化の進んだ風景でした。恐らく漢人農民の入植によって、放牧地が漸次耕地化されるという歴史が、いまでも続いているのではない

ます。

### 落着取り戻した北京

中国側の国境の駅二連から集寧、大同、張家口を経て北京に到着しました。北京は私には八年振りでした。前回は文革の一番激しい時で、紅衛兵が街頭に一杯溢れていました。それに較べると、本当にのんびりしていました。前回は到る処に毛沢東語録や毛沢東讃歌がありました。今回は一切そういうものはありませんでした。汽車の服務員も暇があればトランプをしていました。北京で泊った新僑飯店でも、トランプをしているのを目撃しました。文革当時は思いもよらないことです。それほど中国の変化は大きいと言えます。

毛沢東を讃えたり、中国共産党を讃えるスローガンは確にありますが、農村などには非常に少なくなっています。明らかに全部塗りかえられています。例えば、故宮博物院などに行つて

も、大きな城壁のスローガンは塗り潰してあります。そんなところにも現われているように、表向きは綺麗になっており、落着きがみられます。洋服なども八年振りにみるとかなり綺麗になっています。

前回は三週間中国各地を歩きましたが、グラビアによく出てくる耕耘機、トラクターなどほとんど見掛けませんでした。今回は北京郊外の農村でも見掛けました。自動車も多くなっており、経済活動がレベルアップしていることが判ります。自転車もニューモードのものが多く、王府井の東風市場、東単、西単の市場を見ても、品物が非常に豊富になっています。香港で中共製品を販売している国貨公司と変らないとみてよく、品物も非常に多くなっています。

同時に、手鼻をかんだり、痰を吐いたりする人間が多くなりました。文革当時はほとんど見掛けなかったことです。交通道德の乱れも非常なもので、自動車も増えたせいで、北京は交通

けられ、番兵がいて一メートル以内に近寄れない状況です。

なぜこのように警戒が厳しいかという点、要人が住んでいる中南海に近いからです。景山に登れば中南海の中が見えますし、北海公園は中南海に続いていますので、一般の立入りを禁止しているのだと思います。帰国して、私がこの話をしたら、私の大学の中国語の先生が大変困っていました。教科書には、今日は北海公園に行きました、と誰でも行けるように書いてあるからです。日本の新聞は、このことを報じたことはありませんから、誰も知らないのです。皇居を中南海とみて日本に当嵌めてみると、パレスサイドホテルとか丸の内のビル街、日比谷公園などは立入り禁止地帯で、祝田橋辺りに鉄柵が設けられているということになります。

### 矛盾にみちた全人代

こういう世界が一方にあるわけです。北京の

事故が非常に多いということです。香港などの例を見ても判る通り、中国人は信号を無視して歩きますから事故も多いわけです。政治面などでは毛沢東の一条乱れぬ統率の下にすべてが行われているのに、交通道德は非常に悪いというところに、中国の素顔が現われているという気がしますし、中国は当り前になりつつあるとも言えます。

そういう中国の実態を私は見てきましたが、といってそれだけが現在の中国ではありません。これは誰でも気のつく表面の現象からみた中国ですが、一方では御承知のように、全国人民代表大会が開かれても、全く開催が知らされないまますべてが行われるという世界もあります。これは現象的世界にもあるのです。確かに街の表情は落着いてきましたが、例えば、北海公園、故宮の裏の景山など市民の立入り禁止地区になっています。三〇メートルおきぐらいに番兵が立っており、北海にかかる橋には鉄柵が設

けられ、番兵がいて一メートル以内に近寄れない状況です。なぜこのように警戒が厳しいかという点、要人が住んでいる中南海に近いからです。景山に登れば中南海の中が見えますし、北海公園は中南海に続いていますので、一般の立入りを禁止しているのだと思います。帰国して、私がこの話をしたら、私の大学の中国語の先生が大変困っていました。教科書には、今日は北海公園に行きました、と誰でも行けるように書いてあるからです。日本の新聞は、このことを報じたことはありませんから、誰も知らないのです。皇居を中南海とみて日本に当嵌めてみると、パレスサイドホテルとか丸の内のビル街、日比谷公園などは立入り禁止地帯で、祝田橋辺りに鉄柵が設けられているということになります。

中国自身もわが国は発展途上国であるといっているように、国家建設が重大な問題であることは分かりますが、北京の状況から全国を類推すると大変なことだということが分かります。

このような中国の現状を考えると、今回の全国人民代表大会に現われているような政治第一の

社会ではどうしようもないわけです。どうしても経済建設が中心にならばなければならぬといことが、周恩来報告にある実務的な社会を要請しているのではないかと思います。

確に、今回の全国人民代表大会をみても矛盾はあります。憲法を見る限り毛沢東路線が強く出ていますが、人面をみると実務家の隆盛という事実は否定できません。それは、縦坐標における党の一元的指導を中心とする毛沢東路線の貫徹であり、横坐標における実務派官僚の厚い壁との矛盾であろうと思います。今日の中国が当面しているものを、そのまま反映していると思えますし、その矛盾が、そのまま出たのが今回の全国人民代表大会であると思えます。しかし、その矛盾は文革のような爆発を遂げるエネルギーにもならないし、民衆の間には脱政治の雰囲気のみなびっているのが現状です。もう沢山という気分があるわけです。

### 建設志向型の指導部

批林批孔運動というものも当初の性格が挫折して、周恩来批判まで行かなかつた。今回発表された文章を読みましても、十全大会で王洪文が強調し、批林批孔運動の相言葉ともなった反潮流、反復権という言葉は何処にも出てきません。結局それは無理だったのです。それが、現在の中国です。しかも中国は毛・周なきあとどうするか、という大問題を依然解決しておらずすべての人がこのことを気にしています。この焦慮は大変なものです。それが幾つかの矛盾や不満を残しながらも凝集力となつて、ともかく一つの形を作つたのが今回の大会です。問題がないわけではなく、逆に問題が多いからこそ漸進的な体制が出来たのだ、と私は思います。一部には再び河南地区に壁新聞があつたとか、姚文元の新しい論文は何を意味するのか、といった見方もありますが、(三三頁へ続く)

## 文革後の幹部復権の条件

山川晴男

### はじめに

最近、中国で文化革命当時追放あるいは解任された幹部の復権が行われ、原職に復帰したりあるいは他の職に任命され、長らく公開の席に現われることのなかった人物が新聞報道面によく現われるようになった。しかし、彼らの復権理由はほとんど発表されたことはなく、いろいろ推測は行われても、真相はほとんど判らないのが実状である。従つて、それらの人物の現在の地位が安定したものであるのか、あるいはその将来はどうなるのかという点を判断することも出来ないのが現状である。

ところが、最近台湾当局が、中共中央弁公室主任汪東興の幹部復権の条件についての報告を入手したと発表している(「中央日報」七五・三・一三)。報道されたのは報告の一部、幹部復権に関する部分だけのようであるから、その信憑性を判断する手懸りはないわけであるけれども、内容からみてありそうなるに思われる面もある。ここに挙げられている条件は、文革後のいろいろな機会に行われている批判とも符節する点もあり、また特定個人が復権者の人選をするにしても基準は必要であろうということを考えると、本物のようにも思われる。最近復権しつつある幹部が、どの条項に該当して復

を起こし、党の民主集中制に服従せず、林・陳に対する反対が個人と小グループのためだけになされたものは復権できない。

(四)路線に関連する誤り、あるいは職務上革命事業に重大な損害を与えたもので、林・陳の申請に基き組織の結論を中央が承認した処分さるべき人間が、中央の決定を執行することと執行者の罪を混同することは出来ない。それを理由に、中央の研究を経た決定を否定する状況が見られるが、これは決定を覆えそうとするものである。

(五)党の十回の路線闘争の中で、左右の機会主義路線を執行、重大な政治的誤りを犯し、批判を受けても改めないもの、また改めても間もなく再び誤りを犯したものは、林・陳に反対して多少の革命スローガンを叫んだとしても、實際は革命のためではない。運よく彼らが林・陳を打倒することになったとしても、矢張り彼らは悪人であって、悪人は肅清さるべきだが、彼ら

を利用することは革命にとってよいことである。これら一部のものは復権できない。

(六)文化革命中、中央の通達した毛主席指示、決議、一部の中央局、省に対する処理意見は、個々の林・陳のでたらめな報告あるいは毛主席の名義を借りた命令で当を欠くもので現在研究中のものを除いて、大部分は正確なものである。この点は肯定しなければならず、これを覆すことは出来ない。

(七)林・陳の仲間であって派閥間の公然・隠然たる奪権闘争の結果、仲間うちの他の派閥のため追出され、瓦解させられたものの一部のものが、不遇の際革命派を装い、少しばかりうまい話をしたからといって、その本心は反動であり、やはり林・陳の一方であることに変わりはない。このような人間は用いることは出来ず、彼らの醜悪な本質をバクローして、革命隊列の中に波風を立てないようにしなければならない。

(八)分派主義とは異なるが、林・陳に利用され

てその他の分派の野心家を打倒したものは、復権することは出来ない。

(九)地主・富農・反動分子・破壊分子・右派分子・反動資本家およびその他の階級の敵が林・陳および各地のその一党に反対することを利用して、革命の旗印しを掲げ、革命の看板を掲げて反革命復辟と反動活動を行いながら、自分たちは被害者であり無実であるといつて、名を復権に借りて事実を覆えそうとしている。これはプロレタリア階級を覆えし、プロレタリア階級に造反するものである。さらに一部のものは、ソ修特務に利用されて、国内の帝国主義分子、修正主義分子、スパイと共に反革命言論をふりまき、無政府主義の悪い風潮を煽動したのは、情勢を変えようとする陰謀であつて、これは反革命活動であり、階級の敵が決定を覆えそうとするものであるから、プロレタリア階級独裁を用いて、弾圧と制裁を加えなければならない。

(十)上述のような状況の下にある者とその家族

は、その親族のための再審を禁ずる。これは復権の是非の問題ではない。如何なる口実によつても、復権を要求することを禁ずる。

汪東興は講話を終るに当つて、「これは党の政策であるが、もし誤つた所があれば同志諸君が指摘されるよう要請する。私個人が責任を負う」と述べた。(党の政策説明であるが、不十分な点があれば私の誤りということか)。

(二八頁から)私はマルタのミントフ首相と会う毛沢東をテレビで見ましたが、頬はたるんで老齡化が目立ちますし、当然行政能力も低下していると思われ、それを補填する意味で実務能力の優れた人物、例えば鄧小平、張春橋などが台頭せざるを得ない状況にあるのではないかと思います。党官僚の中心になっているのは、この連中で、口先の黄色いイデオロギーだけの、どうしようもない連中ではない、というのが私の感想です。(東京外国語大学助教授、定例研究会報告、文責在記者)

昭和二十六年三月二十日  
昭和五十年四月一日号

第三種郵便物認可  
毎月二回一日、十五日発行

# 主張と解説

再訪中国の新体制を探る

No. 577

今年の春闘

鍋山貞親

モスクワ・ウランバートル・北京

中島嶺雄

文革後の幹部復権の条件

山川晴男

世界民主研究所

第二五卷第七号